

浮世絵師・落合芳幾に関する基礎的研究

菅原真弓

- 一、はじめに
- 二、浮世絵師・落合芳幾に関する研究史
- (一) 落合芳幾に関する研究資料
- (二) 落合芳幾研究のこれまでの経緯とその特色
- 三、落合芳幾伝記・研究史を踏まえて
- 四、おわりに：落合芳幾研究の展望

一、はじめに

落合芳幾（おちあい・よししく／天保四年～明治三十七年：一八三三～一九〇四）は、明治期に活躍した浮世絵師の一人である。歌川国芳（一七九七～一八六二）門下の俊秀として名を馳せ、同時代を活躍期とする同門の月岡芳年（一八三九～九三）と、ある時期は人気を二分するほどの人気を誇った。

幕末の慶応二、三年（一八六六、六七）に刊行した「英名二十八衆句」（大判錦絵28枚揃）は彼の代表作の一つであり、芳年との競作であるが、これが「血みどろ絵」の代表的な作例として現在も、ある種特殊な人気を博していることは言を俟たない。また維新後の芳幾は、東京初の日刊紙『東京日日新聞』の創刊（明治五年／一八七二）に参加するなど新聞人として活躍し、明治という新時代における浮世絵師の活路を拓いた存在と言える。新聞記事の内容を錦絵化して出版した新聞錦絵（あるいは錦絵新聞とも^①）という媒体を創始し、彼が描いた「東京日日新聞大錦」（明治七、八年）は大いに人気を博した。加えて新聞挿絵という新しい分野を切り拓いたのもまた、芳幾の功績と言ってよい。

しかしこの絵師に関しては、同時代を活躍期とした、例えば豊原国周（一八三五～一九〇〇）などと同様、研究蓄積が極めて薄い現状と言える^②。残念ながらこれまで個展も開催されておらず、画集も存在しない。

そこで本稿ではこの絵師の基礎的研究を行う。伝記資料の渉獵と確認、これまでの研究史のまとめを行い、その研究の特徴を述べる。またこれまでに発表

された芳幾に関する資料を網羅し、現時点で出来る限りの詳細な伝記を編むこととする。

二、浮世絵師・落合芳幾に関する研究史

(一) 落合芳幾に関する研究

生前から現在に至るまでの芳幾に関する研究資料を、現時点で出来る限り調べまとめたものが、「資料1」落合芳幾文献目録（未定稿）である。ここには芳幾個人に関する資料だけでなく、彼が深く関わった明治期の新聞や関連する資料も含まれているが、総数は六十件であった。本稿筆者はこれまで、幕末から明治初期の浮世絵師たちについて研究を進めてきており、芳幾と同時代の絵師・豊原国周（一八三五～一九〇〇）や、同じく同時代かつ同門の絵師・月岡芳年、また小林清親（一八四七～一九一五）については、いくつかの成果を発表することが出来ている^③。そこで、芳幾やその事績について触れた資料の数を同時代の絵師たちと比べてみると、同門の芳年や清親には大きく水を開けられていることがわかる。月岡芳年に関する資料は、現時点において三百七十三件を数える^④し、小林清親については、少々古いデータであるが、二〇〇三年十月時点において百五十六件であった^⑤。一方、豊原国周については、芳幾とあまり差がない五十三件にとどまる^⑥。触れられた資料の件数を比較することはすなわち、言うまでもなく研究対象としての注目度を比べることとなり、全体的に研究上の関心が寄せられてこなかったこの時代の浮世絵師たちの中でも、芳幾は国周と並び、これまであまり関心が払われてこなかった絵師である事実を明らかにする。

さて、以降は芳幾に関する主な資料を時系列に紹介していくこととする。ここで言う「主な資料」とは、芳幾の伝記事項や画業など全般について触れたものを指し、個々の作品あるいは作品研究は含めないこととする。

① 仮名垣魯文・山々亭有人編、一蕙斎芳幾画『粹興奇人傳』 文久三年（一八六二）

芳幾は三十代前半である文久年間以降、戯作者である仮名垣魯文（一八二九～九四）や山々亭有人（條野探菊、一八三三～一九〇二）らとの交遊が始まっている。明治から昭和初期を活躍期とした新聞人・野崎左文（一八五八～一九三五）が著した『仮名反故』^⑦は、魯文の伝記であるが、ここでは彼を中心とした交遊

の様子を伝えてくれる。そこに「三題断」の再興や流行、そして彼らが結成した「粹興連」の様子が記される。なお『仮名反故』については、別項目を設けて述べる。本資料は魯文と有人が共同で編集し、挿絵を芳幾が担当した書籍(図1)で、芳幾画による口絵に加え粹興連のメンバーの肖像と人物紹介が記される。芳幾自身のページ(図2)もあり、芳幾の肖像のみ梅素亭玄魚(一八一七-一八〇)が担当している。羽織を着用して正座する制作中の様子が描かれる。伝記資料としては最初である本資料中、肖像の上に配された人物紹介(図2部分)を翻刻する。

芳幾は幼名幾次郎、父は日ほん堤に引手茶屋を渡世となせしが、せめて一子がかたぎの商人になさんとて、質店に奉公させしかど、画師にならん事を欲して主家を欠いだしぬ、されどもちちはこれを承引(うけひか)ず、又も奉公させしかど、是もはじめのごとくなれば、いまはのぞみにまかせんとて、終に国よしが門に入りぬ、この仁(ひと)温和にして人とさからふことをせず、しかも孝心あつくして、よく両親につかへ、彼(かの)茶屋渡世をやめ、筆一ぱんにて両親(ふたおや)をやしなふ、その孝道諸神もかんのふましましけん、其わざひひいで、芳名四方(よも)にたかく、当時倭画師(やまとえし)の売出しにこそ

(読点及び()のルビは適宜引用者が付した)

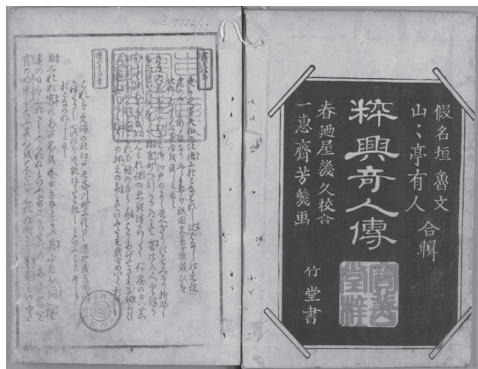


図1 「粹興奇人傳」 国立国会図書館



図2 同「一蕙齋芳幾」(下)部分

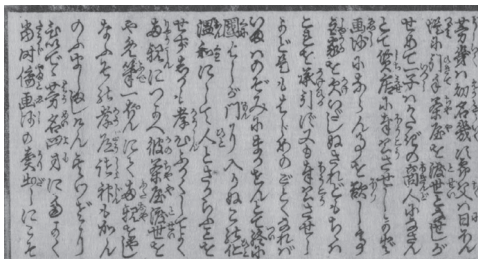


図3 「十目視所／十指々所 花王競 十種咲分 第初輯」



図3 「十目視所／十指々所 花王競 十種咲分 第初輯」

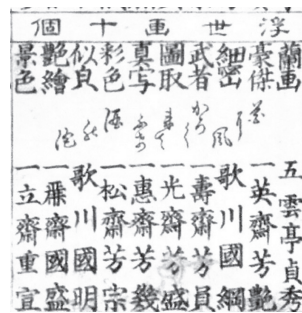


図3 部分

この資料には芳幾の生家の家業や本名(幼名)、浮世絵師としての修業以前の事柄に加えて、その人柄までが記される。本資料によれば、生家の家業は吉原日本堤の引手茶屋(9)であり、幼名は幾次郎であること、当初は質屋に奉公に出されたが、本人が絵師になりたい気持ちが強かったために、ついに許されて浮世絵師になったこと、師は歌川国芳であること、がわかる。また親孝行の良い息子であることも伝えてくれている。しかし一方末尾の記述からは、芳幾がまだ人気絵師にはなっておらず「売り出し」中の存在であることがわかる。

②絵師人気番付・安政六年か、慶應元年、明治元年、明治十八年

在世当時に刊行された人気番付は四種類(10)であり、これを一覽にしたものが

【資料2】人気番付による芳幾の評価(11)である。

②-1 「十目視所／十指々所 花王競十種咲分(はなくらべといろのさきわけ) 第初輯」(12)安政六年か

「西洋学」や「巷街」遊女、「狂歌」など様々な分野の十人を選んだ番付(図3)。「当世十大家」の項には三代歌川豊国が、「筆頭十才子」には歌川国芳が、「若手十芸」には歌川国貞が挙げられているが、芳幾の名は「浮世画十個」の項に「写真 一蕙齋芳幾」として掲載されている。

②-2 『歳盛記』 慶應元年（一八六五）

芳幾は七位に、そして本項冒頭に挙げた同時代の絵師たちの内、月岡芳年は十位に、豊原国周は八位に挙げられている。首位は役者絵をよくした鳥居派の絵師・鳥居清満。ランクインしている絵師たちの画名の多くに「国」や「芳」の字が付してあるが、芳幾のように画名に「芳」が冠せられる絵師は、歌川国芳門の同門の絵師たちで、国周のように「国」が付されている名前は三代歌川豊国門下の絵師である。

②-3 『歳盛記』 明治元年（一八六八）

芳幾は三位へと躍進している。芳年は四位に、そして慶應元年版では芳年より上位にあった国周は五位となり、ここで両者の評価が逆転する。この番付でも「国」や「芳」が付けられた絵師たちの名前が散見される。一方この時点で、芳幾や国周、芳年に既に弟子を持つ身になったこともここから判明する。二十五位に「幾丸」、二十七位に「周延」、そして二十八位に「年次」の名前が見られるが、彼らは順に芳幾、国周、そして芳年の弟子にあたる。

②-4 『東京流行細見記』 明治十八年（一八八五）

明治元年版と変わらず三位に名前が掲載される。しかし弟子である芳年が首位を獲得しており、浮世絵師としての評価は逆転してしまったことがわかる。ちなみに国周は四位。芳年との評価の逆転は、本番付に掲載される弟子数にも如実に示される。ここに芳幾門下は一名も挙げられていないのに対し、「年」を画名に冠した芳年門下は「年恒」（九位）、「年方」（十二位）、「年景」（二十一位）、「年参」（二十三位）の四名に加えて「芳宗」（八位）の名前があり、浮世絵界における勢力の違いが明らかである。ちなみに「周」の字を冠した国周門下の絵師は「周延」（十一位）と「周重」（十八位）の二名が挙げられている。なおここで初めて、小林清親の名前が十五位に見える。

総観してみたところ、芳幾の人氣番付による評価は最初期からはほぼ変わらず一貫して高い。しかしながら、同時代の絵師たちが徐々に力をつけ、また弟子たちの指導にも力を注いで勢力の拡大がはかられていることと比較すると、かなり孤独な状態へと推移している様子が窺える。また、明治十八年の番付では因縁浅からぬ弟子・芳年^①に首位を奪われ、かつ狩野派出身でありながら本挿絵や版画で人氣を博した小林永濯（一八四三～九〇）の下に位置することとなった。順位に大きな変動はないものの、徐々に浮世絵界の中心人物の座を降

りていく経過が番付には見られる。

③ 皎々舎梅畦編、芳幾画『久万那幾影』 慶應三年（一八六七）

前項①にも挙げた通り、芳幾は文久年間以降、戯作者たちなど幕末の文化人（通人）たちとの親しい交流を持った。彼らの遊びの一つに、先に記した「三題噺」があり、そして「興画合」があった^④。「興画合」とは「時々決められた「兼題（題目）」を文字や歌舞伎を背景とする見立て、言葉遊びなどを通して異なるイメージに読み変え、これを画に描き出ればえを競う遊び」^⑤のことである。本書はこの「興画合」の中心人物であった波月亭花雪の三回忌の追善として出されたもので、その中にはメンバーの一人であった芳幾の影像（図4）およびテキストも記される。記載は以下の通り。

両国米沢町に住し当時浮世絵三傑と称せらるゝ、會て筆才のみならず頓智
 発明世才にたけ、殊に秀句頓才の達人にして平生の軽口実に滑稽の長者た
 り、さはあれ志正く賢にして人に誘引れ、浮たる席に列る事あれども興盡
 る頃を量り、退きて家に帰り他に一泊せし事なしといへり、
 つとめしと筆に眼のつく夏書かな 芳幾

（適宜、新字に修正）

「当時浮世絵三傑」との幕末における浮世絵界の評価が記されるほか、「平生の軽口実に滑稽の長者たり」とその江戸っ子らしい性格や、外泊はしない堅実さなどが記されており、三十五歳当時の芳幾を間近に見た記録となっている。

④ 三囲の碑（一勇齋歌川先生墓表）…明治六年（一八七三）

明治六年十月、師である歌川国芳の十三回忌にあたり、親族及び門人たちによって建立された碑である。向島三囲稲荷社の絵馬堂西に建てられており、現存。碑の裏面には門人一同の名が刻まれており、芳幾の名は六番目にある。ま



図4 『久万那幾影』より「芳幾」

た「芳幾社中」として「幾丸 幾英 幾勝」の三名の芳幾門人の名も見られる¹⁶⁾。

⑤野崎左文『仮名反故』明治二十八年（一八九五）

先にも少し触れた通り、野崎左文が著した『仮名反故』は、戯作者であり新聞人でもあった仮名垣魯文の逸話を集めた伝記である。魯文は左文の師であった。魯文が亡くなった直後の明治二十七年（一八九四）十二月には脱稿し、翌二十八年二月に版行された¹⁷⁾。

芳幾とは親交が深かった魯文の伝記だけに、芳幾の名が登場する記述も多く見られる。たとえば最も早い時期のものとしては、安政四年（一八五七）の記述がある。

安政四年の春魯文は「操松月景清（みさをのまつつきのかげきよ）」といふ三冊物の草双紙を著し口絵さし絵とも一恵斎芳幾筆にて呉服町の書肆植屋茂吉方より出版す、魯文はまで著はせし戯作多かりしも皆切附本と称する印刷紙質とも粗悪なる冊子のみなりしに此書は彫刻精巧、製本も亦美を尽したれば世評随つて宜しきのみならず魯文も亦初めて檜舞台に上りたる心地なりと言ひて喜びしとん、

（一）内は原文のルビ

芳幾が口絵と挿絵を担当した合巻が好評を博したとする内容である。続く文久年間には、魯文ら戯作者たちや歌舞伎狂言作者、噺家たちとも親しく交遊する様子が記される。先にも少し触れた三題噺のことである。

其頃また三題噺（さんたいばなし）の催し流行せり、是（こ）は文化の昔し元祖三笑亭可楽が一分線香三題ばなしと名づけ下谷広徳寺前なる孔雀長屋に演じて当時大評判を取りしを思ひ出し柳島の金座役人高野某（匿名花見又酔桜／軒とも号せり）が之を再興せんものと仮名垣魯文、山々亭有人、河竹新七（後黙阿／弥と改む）綾岡輝松、梅素玄魚、落合芳幾、武田交来、福井扇夫、瀬川如臯の諸氏、黒人（くろうと）の三遊亭円朝、柳亭左楽、春風亭柳枝等と謀り其仲間を粹興連と名づけ文久二年の秋日本橋万町の柏木亭に高座を設け知己朋友及び其家族等を聴衆となし各々三ツの兼題を結び

て一席の落語に綴り高座にて講演せしが人気これに集ひて忽ち市中の評判となり翌年は大伝馬町の豪商勝田某（匿名春の／屋幾久）別に興笑連なるものを組立て両国の柳屋楼上を以て定席とせしにぞ夫より後は、粹興、興笑の両連は昔噺の昔といふ字に因みて毎月廿一日交る／＼同会を催せしに終には江戸一種の流行物となり其流行に連れて三題扇子、蒔絵三題櫛、三題張煙管、銘酒三題ばなし、三題菓子、三題染浴衣、三題模様半襟などを売出す者多く又後には粹興奇人伝（馬喰町二丁／目丸徳出版）三題噺評判記（同上）春色三題噺（春の屋著作／銀町善版）など云へる書籍（しよじやく）の出版を見るに至れり、

（一）はルビ、または原文の二段書き部分

前後の記述で補完すると、これは文久初年頃のことと察せられる。この時期に芳幾は戯作者や狂言作者、そして噺家たちと共に「三題噺」の集まりを持ち、「粹興連」という組織を作っていたことがわかる。ここに挙げられた中に、浮世絵師は芳幾の名しか見当たらず、絵師の立場でありながら、彼ら幕末市井の文化人たちの仲間入りを、既にこの時期にはしていたことが窺える。彼らが興じたものは「三題噺」だけではなく、仲間内の不行跡などをあげつらつて風刺した「悪摺（あくずり）」と呼ばれた版画もあった。

魯文翁の外に好んで悪摺を作りし者は山々亭有人（条野／採菊）二代目柳亭種彦（初号笠／亭仙果）梅素玄魚、武田交来、一恵斎芳幾、葛飾酔桜軒（高野／基、出揚扇夫等の諸氏にて殊に盛衰競、南子（なんこ）の馬鹿など云へる悪摺は大に文人社会を騒がせしのみならず是に就て奇談頗る多けれど（略）

なおこの記述にある「粹興奇人傳」については前掲の通り。

⑥「一恵斎芳幾の末路」『此花』第十七枝、明治四十四年（一九一七）九月

芳幾が亡くなって七年という段階で、交友があった清水晴風からの聞き書きという形でまとめられた文章で、芳幾の晩年を知る好資料である。

「芳幾の晩年ですか、イヤ悲惨（みじめ）なもので御坐いました」と始まるこ

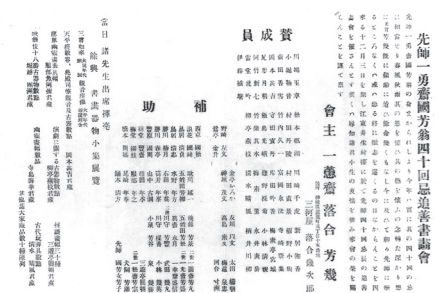
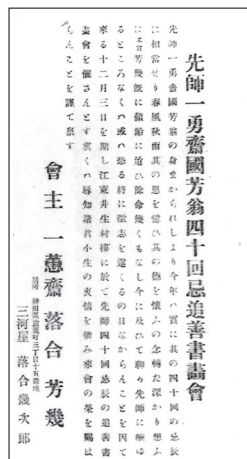


図5 「先師一勇齋国芳翁四十回忌追善書画会」、(下) 同部分



の資料には、芳幾の寂しい晩年が記される。明治二十三年(二八九〇)の『東京絵入新聞』終刊後はまず、葺屋町にあるレンガ造り三階建ての立派な家を借りて、妻、息子、娘夫婦と共に住んでいた

という。家賃は「廿円」(今ならば七八十円もいやといふ)との補記あり)という高額な借家だったと伝える。目論見としては、娘婿に歯科を開業させ、息子に薬剤師を、そして自分は画の注文に応えるというものだったが失敗し、一家離散の状態になったという。絵画だけでは生活していけないと、「美術人形」の制作など様々な事業を試みるがごとく失敗し、大きな借金を抱える身になったと伝える。

そこで近い友人たちが企画したが、師国芳の四十回忌の開催だった。明治32年に行われたこの追善書画会については、案内状が現存しており、既に紹介されている(図5、同部分)。しかしこの会が成功をおさめ、まとまった金額が芳幾の許に入ったことで、かえって困窮を深めることになった経緯を、本資料が左のように記している。

友人等が心配して、師匠国芳の追善を兼ねて名納会をしたなら、幾許か纏つた金子が寄るだらうといふので、大槻如電さんや何か奔走して会を開きました。予想したより盛会で、閉会後勘定した所五百円から残りまじつた、これが丁度暮近くの事で、来年は久し振で芳幾さんもよい正月をすんだらうと噂をして居ましたが(中略)芳幾さんの話に、今度はどうしても夜逃をしなければならぬといふので、夫はどうした訳かと段々聞きますと、会で金子が手に入ったのを聞いて借金取が押寄せたから皆払うたが未だ

不足で催促が前よりも厳しい(中略)とうとう正月から戸の閉め続けで間もなく本所の太平町の汚い棟割長屋へ引移り長らくの病気に心配の仕通しで歿せられました(後略)

⑦ 莊逸楼主人「落合芳幾」『浮世絵』九号、大正五年(一九一六)二月

戯作者との交遊と「三題噺」や「悪摺」などについて記し、さらに「三題噺」の番付(作者評判記)に掲載されていること、その評価を記す。そしてその影絵作品「久萬那幾影(くまなきかげ)」であったとする。これは、彼らのサークルである興画会を主催した波月亭花雪の三回忌追善として出版したもので、メンパーの横顔の肖像を影絵で表し「頗る世人の注意を引いた」という。

しかし筆者は、影絵の作品群よりも「それより功績の大なるは明治八年同志と共に東京絵入新聞を興して、新聞に挿絵を創始した一事は大に特筆すべき事である」と、新聞人としての側面を評価する。さらに『歌舞伎新報』に掲載した役者似顔をも高く評価し「此人の似顔絵は、国周の筆より第一層突込んで写生した傾きがある」と記す。

人柄についても「一体に技工の才は充分あつたが今云ふ江戸ッ子が災ひをなして失敗したのは誠に惜しいものである」と触れている。加えて本資料は、その死と墓所について記した最初のものとなった。

晩年大に振はず明治三十七年二月六日本所太平町の寓居で没した、年七十二、法名、從善院芳幾日雄居士(じゅうぜんいんほうきにちゆうこじ)、浅草吉野町日蓮宗安盛寺へ葬むつた(略)

() 内はルビ

なお安盛寺はその後浅草清島町の盛泰寺(じょうたい)寺と合併、池袋字蟹ヶ窪へと移転したとし、落合家の墓石図版を掲載する。但しその墓石には芳幾の名は刻まれていないという。

⑧ 淡島寒月「私の幼かりし頃」『錦絵』二号、大正六年(一九一七)五月(後に同氏「梵雲庵雑話」(9)に収録)

作家淡島寒月による明治時代の思い出を記した文章の中で、明治の浮世絵界における芳幾の評価を、他の絵師との比較の上で記している。

(略) 欧化主義の最初の企ての如く、清親の水彩画のような風景画が両国の大黒屋から出板されて、頗る売れたものである。役者絵は国周で独占され、芳年は美人と血糊のついたような絵で持て、また芳幾は錦絵としては出さずに、『安愚楽鍋』『西洋道中膝栗毛』などの挿絵で評判だった。(略)

ここで注目すべき点は、他の絵師については錦絵を例示するのに対し、芳幾については「錦絵としては出さずに」とあり、芳幾が錦絵制作から距離を置いている印象を持っていることだ。ちなみに『安愚楽鍋』は明治四年から、『西洋道中膝栗毛』は明治三年から刊行された開化風俗を描き出した合巻で、いずれも仮名垣魯文の作である。

⑨ 靄軒生「落合芳幾『明治の錦絵』」『日本及日本人』70号、大正六年(一九一七) 芳幾の伝記や在世当時の評価などを広範に記したものである。国芳入門のこゝと、安政地震の際の作画やその評価、まさしく江戸っ子であったという人柄、その画業、さらに戯作者たちとの交遊について記している。

安政地震の際、命の危険をも顧みず、吉原遊廓の惨状を三枚続にして描き出し、これを版行したところ一か月で「二十杯(＝四千組)の売高」に及び、「芳幾の画名は忽に伝播」したとする逸話を記している。一方、この地震で「臨月の妻は嫖客を吉原の稲本楼に送り往き、入口の梁に打れて横死を遂ぐ」とあり、また自家も潰れてしまった不幸をも併せて記す。

人となりについては「温厚著実にして如才なく、座談に長じ洒落は口を衝いて出で、既に洒落幾の名を得」とし、その人柄が若くして広い交友関係を得た一因であろうとする。

画業については、先に資料③として挙げた『久万那幾影』(慶應三年／一八六七)や、影絵による役者絵シリーズ「真写月花乃姿絵」(まことづきはなのみすがたえ)を挙げ、これらの企画にも関係していた戯作者ら仲間たちと共に東京日日新聞を創刊し、かつ明治八年には東京絵入新聞を創刊した事実を述べる。なお『東京絵入新聞』の創刊とその評価に関しては、本項資料⑦の記述を踏襲したものだ。

さらに絵師としての芳幾の評価を以下のように記す。

芳幾の全盛期は文久慶應の年間にあり、文久元年出版の『浮世絵番附』⁽⁹⁾にも亀戸豊国を勧進元とし、梅蝶楼国貞を行司となし、芳幾を東の大関に据え、西の大関は国周を置きしを見ても、其の当否は暫く措き兎に角人氣のありし事は想像し得らる。

また本資料では、芳幾と国周の役者絵を比較し、「綺麗を専らとする国周の筆意に反し、芳幾は写実を主として特徴を明かにすれば、往々真に迫るものあり」と、役者絵における肖似性の観点から、芳幾を国周よりも優れていたと評価する。

しかし一方、師・国芳が語ったという芳幾と芳年についての比較評価も記される。

嘗て国芳言へることあり、芳幾は器用に任せて筆を走らせば、画に覇気なく熱血なし、芳年は覇気に富めども不器用なり、芳幾にして芳年の半分覇気あらんか、今の浮世絵師中その右に出る者なからんと、

この記述は、芳幾については無論の事、芳年に関しても重要な指摘と言える。そして最後にその死と家族について記す。六男四女があったが、それは全て後妻の連れ子であり、そのうち末子の六郎が父を継いで画家となったこと、六郎(画名芳麿)は富岡永洗に師事して新派劇の番付を多く描いたが三十歳にして没したことを記している。

⑩ 樋口二葉「落合芳幾」『新小説』大正十五年(一九一六)八月号(浮世絵趣味号) 本項③⑤⑥⑦⑨の資料を基にまとめた記述となっている。生家と家族、国芳への入門、安政大地震の際の作画とその成功、いわゆる江戸っ子である人柄、戯作者たちとの交流と三題斬、悪摺、興画合などの遊びについては、先行資料の内容を踏襲している。

先行資料に記されていない事柄としては『今古実録』の刊行が挙げられる。「同志の広岡幸助が主となつて活版印刷社を経営し榮泉社といつたが、榮泉社

にて『今古実録』といふを出して、其挿画を擔任したと記される。その第一号と目されるのが『今古実録 大塩平八郎伝記』(国文学研究資料館蔵^⑫)である。



図6 『今古実録 大塩平八郎伝記』

奥付を見ると「明治十五年一月十七日御届」とあり、刊行は「栄泉社」と記されている。同書国会図書館所蔵本下巻表紙(図6)には「一蕙齋芳幾画」と明記されており、挿画担当者としてネームバリューがあったことを窺わせる好資料と言える。

⑪井上和雄『浮世絵師傳』より「芳幾」昭和六年(一九三二)、渡邊版画店いわゆる『浮世絵類考』諸本の掉尾となる浮世絵師の人名事典である。

生没年や画系、作画期などを冒頭に記し、伝記事項の前半部分は本項で挙げた資料①『粹興奇人傳』に載る芳幾伝に準拠したものととなっている。

後半の新聞事業等については、本項で挙げた先行資料③⑤⑥⑦⑨を参照している。しかし『東京日日新聞』の錦絵新聞(明治七年十月から翌八年七月まで)については、本資料によって初めて紹介されている。またこの『東京日日新聞』は、幕末以来の仲間(戯作者たちなど)と共同で創刊したものであるにもかかわらず、創刊事業そのものについては記していない。

⑫樋口弘『幕末明治の浮世絵集成』より「幕末明治の浮世絵師伝」昭和三十年(一九五五)、味燈書屋^⑬

本項の先行資料のうち主に③⑤⑥⑦⑨を参照した伝記。但し「一蕙齋、蕙齋、朝霞楼、晒落齋等の数号があつた」とするなど、作品に即しての記述も見られる。

⑬鈴木仁「末期浮世絵の異色作―国芳・芳年・芳幾―」『古美術』34号、昭和四十六年(一九七二)

本資料は、ここまで挙げてきた文献とは違い、芳幾の伝記事項や画業全般について触れたものではないが、この時期以降近年まで続いている「血みどろ絵」評価を表す文献として挙げた。本稿冒頭にも記した通り、慶應二年(二八六六)に版行された芳幾と芳年の競作「英名二十八衆句」(二十八枚揃、各十四図ずつ制作)を主に取り上げ、同じく血みどろ絵とされる芳年「魁題百撰相」(慶應四年、明治二年/一八六八、六九)との比較を行ったものである。なおそれぞれの絵師の伝記事項や他の作例などは記していない。

⑭高橋誠一郎「総説・明治版画」のうち「芳年の兄弟子芳幾」同氏編『浮世絵大系 12 清親』昭和四十九年(一九七四)、集英社

時代別にその時代の代表的な浮世絵師たちの画業を総観した浮世絵の画集である。芳幾は、巻のタイトルである小林清親や弟子月岡芳年、役者絵をよくした豊原国周と共に掲載される。本全集は原寸大のカラー図版を掲載していることが特色だが、この巻では清親が十二点、月岡芳年が七点、豊原国周が五点掲載されているのに対し、芳幾作品は三点を数えるのみである。カラー図版の掲載点数は本資料編集当時における芳幾の評価を如実に表すものと言えるだろう。

高橋氏による論考「総説・明治版画」には小項目「芳年の兄弟子芳幾」が立てられるが、清親には四頁、芳年、国周にはそれぞれ二頁が充てられているのに対し、芳幾は一頁程度となっており、注目度の低さが窺われる。また、他の絵師については同氏による作品評価などが記されているのに対し、芳幾に関しては本項で挙げた伝記資料をまとめたのみである。

⑮日本浮世絵協会編『原色浮世絵大百科事典 第九巻 作品四 広重・清親』のうち「落合芳幾」昭和五十六年(一九八一)、大修館

日本浮世絵協会(現国際浮世絵学会)が編集した全十一巻から成る浮世絵全集。芳幾は第九巻に、主な作品と共に見開き一頁の紙面で紹介される。しかし小林清親に関しては見開き六頁、月岡芳年に五頁、豊原国周にも二頁が割かれていることを踏まえると、同時代を活躍期とする絵師たちに比べ、その評価は

極めて低いと言わざるを得ない。

(二) 落合芳幾研究のこれまでの経緯とその特色

前項では落合芳幾の人物像や伝記、事績について記した主な研究資料を、時系列に提示した。これにより、いつの時点で誰がどのような指摘をしたのか、そしてそれがどのように踏襲され、かつまたまとめられていくのかが見えてきた。また本章冒頭にも記した通り、前項での提示資料を含む落合芳幾に関する文献をまとめた「資料1」落合芳幾文献目録(未定稿)を総観することにより、これまでの経緯とその特色が判明する。

芳幾研究の経緯とその特色について述べる。在世当時から記録が残っている事が最も大きな特色と言える。例えば①『粹興奇人傳』(一八六一)(図3)刊行当時の芳幾の年齢は三十一歳で、まだまだ若手の絵師であった。また③『久万那幾影』(二八六七)も、芳幾自身が参加していた興画合のメンバーの影絵を自身が挿画を担当したものである。そしてここにも芳幾の影絵ならびに略伝が掲載(図4)されている。そしてこれらの記述を基に、没後資料における芳幾伝記が形成されていくことがわかる。芳幾没後の資料として最も早いものは、⑥「二蕙齋芳幾の末路」(一九一七)であるが、前述の通り、これは生前を知る人物からの聞き書きというスタイルである。その後、大正初期には⑦莊逸楼主人「落合芳幾」(一九一六)、⑧霽軒生「落合芳幾」《明治の錦絵》(一九一七)等おそらくは生前を知る関係者からの取材によって成立した伝記の基礎資料が形成されていく。しかし大正末年の⑩樋口二葉「落合芳幾」(一九二五)以降は、ほぼ基礎資料の踏襲となっていくことがわかる。またこの樋口論文⑩以降、芳幾の名をタイトルに冠した論文は二〇〇二年(鈴木いつか「落合芳幾―その生涯と幕末明治における画業の意義」^⑫)を待たねばならない。また「資料1」からは、芳幾のみを取り上げた画集や個展の開催、そして単行書(研究書)の刊行もなすということが明らかになる。

「資料1」からはさらに、昭和八年(一九三三)から同三十年(一九五五)までの間、芳幾に関する研究は全く発表されていないことも判明する。但しこうした状況は、同時代の浮世絵師である豊原国周や月岡芳年にも共通している^⑬。浮世絵という存在が、研究対象として言わば「歴史化」されていく時の価値判断の基準は、明治浮世絵の場合、新時代にふさわしい清新さに置かれていたこ

とは、既に述べている^⑭が、芳幾もまたその基準からは外れた存在だったということであろう。

しかしさらに芳幾の場合、錦絵作品に関する研究上の関心が極めて薄いとすることも、浮世絵師としての低評価の一因かと考えられる。芳幾研究においては、⑨霽軒生「落合芳幾」《明治の錦絵》(一九一七)に記される影絵による役者絵シリーズ「真写月花乃姿絵」(慶應三年/一八六七)や、⑪井上和雄「浮世絵師傳」より「芳幾」(一九三二)にある「東京日日新聞」の錦絵新聞(明治七年/八年/一八七四〜七五)以外は錦絵作品が取り上げられることは始まらない。他には⑦莊逸楼主人「落合芳幾」(一九一六)に「写真を引延したやり方の似顔絵」と記される「俳優写真鏡」(明治三年/一八七〇)があるのみで、芳年との競作で知られる「英名二十八衆句」(慶應二三年/一八六六〜六七)が紹介されるのは、遙か後年の⑬鈴木仁一「末期浮世絵の異色作―国芳・芳年・芳幾―」(一九七二)のことである^⑮。また共に在世時の記録である⑧淡島寒月「私の幼かりし頃」(一九一七)が語る「芳幾は錦絵としては出さずに、『安愚楽鍋』『西洋道中膝栗毛』などの挿絵で評判だった。」という言葉や、飯島虚心(半十郎)の『浮世絵師便覧』(二八九三)の以下の記述からは、在世時から錦絵を描く絵師としての認識は薄かったということも判明する。

芳幾

歌川、○国芳門人、落合氏、俗称幾次郎、朝霞楼、蕙齋閑人、一幾齋等の号あり、今画かず、○嘉永、明治

飯島半十郎『浮世絵師便覧』より「芳幾」の項

そして現存作品から類推しても芳幾筆の錦絵作品は少ない。それはむしろ芳幾が、錦絵という媒体よりも自ら新しい媒体である新聞や雑誌を活躍の場に選んだ結果と言えよう。しかし新聞の研究においても、その挿画への言及はまずは留保されてきたことは容易に想像でき、したがって芳幾は明治という新時代にふさわしい新しいものに挑戦し続けたにもかかわらず、等閑視されたまま現在に至ることになった、と言えるのではないだろうか。

近年になってようやく、特に一連の「影絵」作品群への関心が高まりを見せ、芳幾研究は緒に就いたところと言える。それは平成七年(一九九五)の

「影絵」の十九世紀」展（於・サントリー美術館）開催と、この展覧会を担当された岡戸敏幸氏による論考群^⑧が大きなきっかけとなったことは言うまでもない。また錦絵新聞についても、早くは小野秀雄氏による貴重な研究『新聞錦絵』（一九七二）があり、昭和末年からの土屋礼子氏による一連の研究によって豊かな実りを見せている^⑨。

現在では、先学の研究成果に基づいた貴重な研究が続々と発表され始めており、芳幾研究の進捗に期待が持たれるところである^⑩。

三、落合芳幾伝記と研究史を踏まえて

前章で紹介した芳幾に関する基本的な資料の記述とその他の研究、そして作品資料データなどを基に、「資料3」落合芳幾年譜（未定稿）を作成した。おそらくは公刊される芳幾個人の年譜としては初のものとなる。以下、前章の検討と「資料3」を踏まえて芳幾の伝記を記す。文中に記した「①」などの記号は、その記述の根拠（初出の出典）を示したもので、「資料3」に挙げた文献番号を意味する。

落合芳幾は、天保四年（一八三三）四月、吉原日本堤下の編笠茶屋の子として生まれた。通称（本名）は落合幾次郎^⑪。引手茶屋の息であるとする記述もあり^⑫、これを踏襲する記述^⑬もあるが、現在は編笠茶屋とするのが定説である。幼少期を国芳門下の一好齋芳兼の息・武内久一（木彫作家）と遊んで過ごし、芳兼の仕事を見ていたという^⑭。父は芳幾を質屋への奉公に行かせたが、絵師への夢絶ち難く、ついに戻ったと伝える^⑮。

国芳への入門は、嘉永二年（一八四九）かその翌年のことで、当時の芳幾は十七、十八歳になっていた。芳兼の紹介による^⑯。なお芳兼の息・武内久一の紹介によるとする説もあるが疑問視されている^⑰。号は一蕙齋（後に蕙齋）、朝霞楼^⑱、晒落斎^⑲などがある^⑳。初筆は合巻『箱根靈驗覽仇討』（柳水亭種清作）の挿絵^㉑とされる。

芳幾がその画名を一躍上げた作品としては、安政二年（一八五五）十月二日に起こった安政江戸地震の惨状を描いた三枚続による錦絵がある。吉原遊廓内の惨状を实地で写生し、直ちに三枚続の錦絵として刊行。続々と注文が殺到し、こうした作品だけでも七、八種類ほど描いたという。未曾有の売り上げで、一説に「二十杯」（四千組）の売り上げを記録したという。またその際、生

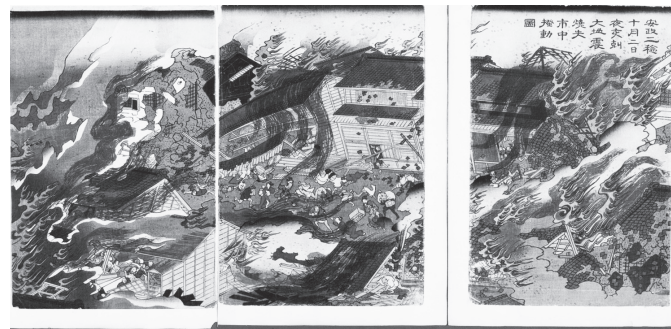


図7 無款（落合芳幾か）「安政二稔十月二日夜亥朱刻大地震焼失市中騒動図」（無認可出版）

家の家業である編笠茶屋の仕事を手伝い、登楼客を吉原遊廓内へと送っていた臨月の妻は廓内で亡くなっている^㉒。先行資料には一連の作品は紹介されていないが、「安政二稔十月二日夜亥朱刻大地震焼失市中騒動図」（図7）と題した無款の作品が東京大学地震研究所に所蔵（石本コレクション^㉓）されており、あるいはこうした作品だったかと思われる。

安政四年に挿絵を担当した『操松月景清』初3編（鈍亭魯文作）も芳幾の画期となった仕事であったろう。⑤野崎左文「仮名反故」は「此書は彫刻精巧、製本も亦美を尽したれば世評随つて宜しきのみならず魯文も亦初めて檜舞台上に上りたる心地なりと言ひて喜びしとなん」と伝えている。こうした仕

事の甲斐あって、翌々安政六年頃の番付「花王競十種咲分」（図3）に「真写一蕙齋芳幾」とその名が載る。さらに翌安政七年（万延元年）閏三月二十一日には、柳橋河半楼で画名の披露を行ったとされ^㉔、言わば新進気鋭の若手絵師として一躍表舞台に上ったとみられる。

続く文久年間（二八六一〜六四）、慶應年間（二八六五〜六八）が、芳幾の全盛期とされる^㉕。文久元年刊行の浮世絵師の番付では東の大関に擬せられたと^㉖、一方この頃から戯作者・仮名垣魯文や山々亭有人（條野採菊）らとの交友が始まる。「三題噺」や「興画合」といった催し物や、友人らの内輪話や行いを諷刺画で描いて配る「悪摺絵」が流行し、その絵を数多く手掛けていく^㉗。「粹興連」という彼らの仲間たちの肖像と略伝を記した『粹興奇人傳』は文久三年に刊行された^㉘。その間、師国芳が文久元年に没しているが、多くの国芳門下を代表して死絵を担当している^㉙。慶應元年には番付「歳盛記」^㉚で七位となり、その翌年には弟子子月岡芳年との競作「英名二十八

衆句」を版行、かつ選ばれてパリ万国博覧会に出品する肉筆浮世絵画帖制作にも従事している(16)。続く慶應三年には興画の会を主催した波月亭花雪の三回忌追善としてメンバーの肖像を影絵で表現した『久萬那畿影』(10、11)、同じく歌舞伎役者の肖像を影絵で描いた「真写月花之姿絵」シリーズ38枚を刊行して好評を博す(10)。錦絵作品の版行と戯作者たちとの交遊の成果のバランスが保たれていた得意の時期であったろう。

明治元年(一八六八)の浮世絵師番付では三位となり(3)、明治初年はいくつかの美人画シリーズ(13)や、役者似顔に写真の視覚を取り入れた「俳優写真鏡」シリーズの版行(21)が見られるが、明治五年に『東京日日新聞』を山々亭有人(條野探菊)、西田伝助と共に創刊(11、22)してからは、新聞や出版事業への傾斜が強くなっていく。記事を錦絵化した「東京日日新聞大錦」(15)や『平仮名絵入新聞』の挿絵(10)、演劇雑誌『歌舞伎新報』(10)など、明治後の作画の場は錦絵から大きく離れていくこととなった。ちなみに『平仮名絵入新聞』の挿絵は、新聞にビジュアルイメージを付した最初の事例として高く評価されている(10)。芳幾の後半生は、後に『東京絵入新聞』と改称したこの新聞を活躍の場としたが、終刊後は様々な事業に着手するも悉く失敗し、失意の晩年となった(8)。明治三十七年二月六日、本所太平町の仮寓にて没。享年七十二(10)。

四、おわりに…落合芳幾研究の展望

本稿では、最後の浮世絵師の一人であり、かつ初期の新聞人であった落合芳幾の基礎的な研究を行った。遺された作品群やこれまでの研究をなるべく綿密にたどることによって、多少なりとも立体的な人物像を構築できたのではないかと考える。

意外とも思えるほどの錦絵作品の少なさの一方で、その後半生に新しい媒体である新聞や雑誌に活躍の場を求め、新機軸をも打ち立てた芳幾の画業は、やがて終焉を迎える浮世絵界において、残された浮世絵師たちの活路を最も早い時期に提示したものと評価することができる。厳密に錦絵という多色刷り木版画に焦点をあてて検討するならば、芳幾の画業は壮年期において既に戦線離脱したと捉えられようが、挿絵や口絵といった印刷媒体に付すビジュアルイメージの歴史という観点から考察するならば積極的な評価を行うことができよう。

また草創期の新聞や雑誌にその足跡を残した人物としての評価も、無論これまで以上に行われるべきであろう(14)。
近年の芳幾研究は主に幕末の、いわゆる「影絵」の作品群に注目したものが多く見られるが、それに加えて、たとえば同世代を生きた浮世絵師たちが直面することになった新たな版技術や写真との関係なども考察の対象とすべきであろうと考える。しかしそれらについては別稿に述べることにさせて頂きたい。

註

(1) 錦絵新聞(新聞錦絵)については、主にメディア史の立場からの研究が進められてきている。端緒としては、小野秀雄『新聞錦絵』(毎日新聞社、一九七二年)があり、また土屋礼子『大阪の錦絵新聞』(三才社、一九九五)や同氏監修によるCD-ROMなど、同氏の研究は、この分野における最も充実した研究成果と言えよう。また近年、これをテーマにした展覧会も多く開催されるようになった。

「幕末・明治のメディア展」早稲田大学図書館、一九八七年

「新聞錦絵―文明開化の事件簿展」板橋区立美術館、一九八九年

「ニュースの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界」東京大学総合博物館、一九九九年

「明治のメディア師たち―錦絵新聞の世界」ニュースパーク(日本新聞博物館)、二〇〇一年

(2) 豊原国周の研究史については、拙稿「豊原国周研究序説」(『GENESIS』(京都造形芸術大学紀要)18号、二〇一四年)で既に述べている。また、芳幾と同門であり、同時代の絵師・月岡芳年の研究史とその特徴についてもやはり拙稿「日本美術における「奇想」の受容―月岡芳年を中心に―」(『美術史論集』16号、二〇一六年、神戸大学美術史研究会)で既に述べている。

(3) 月岡芳年については、左の通り。

拙著『浮世絵版画の十九世紀 風景の時間、歴史の空間』(ブリュッケ、二〇〇九年)

拙著『謎解き浮世絵叢書 月岡芳年「和漢百物語」』(二玄社、二〇一一年)
拙稿「月岡芳年画風変遷試考」『浮世絵芸術』115号(日本浮世絵協会、一九九五年)

拙稿「月岡芳年歴史画考」『美術史』一四一冊（美術史学会、一九九六年）

拙稿「『前賢故実』の波紋〜月岡芳年を中心に」『没後一二〇年 菊池容齋と明治の美術』（展覧会カタログ、練馬区立美術館、一九九九年）

拙稿「『血みどろ絵』考」『GENESIS』12号（京都造形芸術大学、二〇〇八年）

拙稿「月岡芳年美人画考」『GENESIS』16号（京都造形芸術大学、二〇一二年）

拙稿「月岡芳年と明治の媒体（メディア）」『没後二二〇年 月岡芳年展』（展覧会カタログ、太田記念美術館、二〇一二年）

拙稿「月岡芳年と『江戸』『浮世絵研究（太田記念美術館研究紀要）』3号（太田記念美術館、二〇一二年）

拙稿「西南戦争錦絵という媒体（メディア）―月岡芳年作品を中心に」『GENESIS』17号（京都造形芸術大学、二〇一三年）

拙稿「日本美術における「奇想」の受容―月岡芳年を中心に」『美術史論集』16号（神戸大学美術史研究会、二〇一六年）註2

一方、豊原国周については、

拙稿「豊原国周研究序説」『GENESIS』18号（京都造形芸術大学、二〇一四年）註2

拙稿「豊原国周研究〜大首絵の構図を中心に」『GENESIS』19号（京都造形芸術大学、二〇一五年）

拙稿「豊原国周研究2〜国周描く美人画作品について〜」『名古屋芸術大学研究紀要』第37巻（名古屋芸術大学、二〇一六年）

がある。また小林清親については、拙著『名所の変貌〜広重から清親へ〜』（展覧会図録、助中山道広重美術館、二〇〇三年）および本図録掲載拙稿「名所」の変貌―小林清親「日本名勝図会」をめぐるについて

拙稿「小林清親の光と広重受容」『GENESIS』11号（京都造形芸術大学、二〇〇七年）

拙著『浮世絵版画の十九世紀』（前掲）がある。

(4) 拙稿「日本美術における「奇想」の受容―月岡芳年を中心に」（註2）に付した【資料】月岡芳年総文献目録（稿）では三二二件を挙げているが、その

後の調査により、二〇一六年五月現在では三七三件となっている。

(5) 拙稿「関連文献目録」（名所の変貌〜広重から清親へ〜）図録、註3。

(6) 拙稿「豊原国周研究序説」（註2）に付した「表1 豊原国周文献目録」による。

(7) 野崎左文『仮名反故』非売品、一八九五年（増補 私の見た明治文壇）2、平凡社東洋文庫、二〇〇七年に所収

(8) 玄魚は幕末期におけるグラフィックデザイナーであり、歌川広重の代表的なシリーズ「名所江戸百景」の目録を手掛けた事でも知られる。

井上和雄『浮世絵師傳』（渡邊版画店、一九三二年）の「玄魚」の項には「摺物の図案及び草双紙の袋絵などに独特の意匠を凝らし書画共に能くしたりき」と記される（文中の真字は適宜新字体に直した）。

(9) 引手茶屋は遊廓の客と店（見世）との間を取り持つ役割で、大規模店（大見世）に登楼する場合は必ず引手茶屋が見世まで案内することになっていたという。

永井義男「引手茶屋」（永井義男『図説 吉原事典』朝日新聞出版（朝日文庫）、二〇一五年

(10) 但し、鶯軒生「落合芳幾」（『日本及日本人』701号、一九一六年）および樋口二葉「落合芳幾」（『新小説』大正十五年八月号（浮世絵趣味号）、一九二六年）には、文久元年（一八六一）に刊行された浮世絵師の番付があり、ここで芳幾は東の大関に擬せられていると記される。該当する番付を探してみたが、残念ながら現時点では発見できていない。

(11) 芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第八巻所収

(12) 新井芳宗（二代）は、芳年の門人で初めの画名を「年雪」といった。父である芳宗（初代）は歌川国芳門人。明治十四年十一月に父の名を継いで「二代芳宗」を名乗った。

(13) 井上和雄「二代芳宗」（同氏『浮世絵師傳』註8）

慶応二年から刊行した錦絵シリーズ「英名二十八衆句」では各14図ずつ競作で担当し、明治に入ってからには錦絵新聞や新聞挿絵などでも競合した存在であった。詳細は後述。なお、師・国芳の葬儀（文久元年／一八六一）の際、芳幾が芳年を足蹴にしたとの言い伝えが残されている（山中古洞「芳年伝備考」第二稿、『浮世絵志』第十七号、一九三〇年五月）。

(14) 慶応二年から刊行した錦絵シリーズ「英名二十八衆句」では各14図ずつ競作で担当し、明治に入ってからには錦絵新聞や新聞挿絵などでも競合した存在であった。詳細は後述。なお、師・国芳の葬儀（文久元年／一八六一）の際、芳幾が芳年を足蹴にしたとの言い伝えが残されている（山中古洞「芳年伝備考」第二稿、『浮世絵志』第十七号、一九三〇年五月）。

- (14) 莊逸楼主人「落合芳幾」(『浮世絵』9号、一九一六年)
- (15) 靄軒生「落合芳幾(明治の錦絵)」(『日本及日本人』70号、一九一七年)
- (16) 岡戸敏幸「一〇 久万那幾影」作品解説(サントリ―美術館編『影絵』の十九世紀) 展覧会図録、一九九五年九月)
- (17) 鈴木重三「総説」のうち「五 没後供養 付、三囲の碑」(同氏『国芳』平凡社、一九九二年)
- (18) なお弟弟子である芳年の門人は、この時点において既に芳幾より多く十名を数えている。
- (19) 註7参照。
- (20) 案内状は恵俊彦氏所蔵。太田記念美術館編『歌川国芳とその一門展』(一九九〇年、太田記念美術館) 図録に掲載されている。
- (21) 底本は淡島寒月『梵雲庵雑話』(岩波書店(岩波文庫)、一九九九年) 註10を参照。
- (22) 国文学研究資料館DB <http://school.nijl.ac.jp/kindai/NIJL/NIJL-00120.html> 二〇一六年五月十一日参照
- (23) ここでの記述は昭和三十七年増補版を底本とした。
- (24) 但し弟弟子である芳年についても、岡丈次郎編『明治名人伝』(柳亭種彦述、小林永濯画、一八八一年、小林鉄次郎版) に略伝と似顔絵が掲載されている。
- (25) 鈴木いつか「落合芳幾―その生涯と幕末明治における画業の意義」(『文化学研究』11号、日本女子大学、二〇〇二年)
- (26) 拙稿「豊原周研究序説」註2
- (27) 拙稿「日本美術における奇想の受容―月岡芳年を中心に」註2
- (28) 拙稿「日本美術における奇想の受容―月岡芳年を中心に」(註2) では、高橋誠一郎氏の言葉(同氏「総説・明治版画」『浮世絵大系 12 清親』昭和四十九年(一九七四) 四月、集英社) を引用して、「明治という新時代に対応した「新しいもの」を生み出すこと、高橋誠一郎氏の言葉を借りるならば「これまででなかったものを表現しようとしていること」が評価すべき事なのであって、芳年や国周が描き出した作品は「旧い浮世絵」のままであるから評価すべきではない、ということなのだ。」と価値判断の基準について述べている。
- (29) 但しこれも芳年の「血みどろ絵」に強い関心が寄せられた時期に発表されたもので、芳幾作品への言及とは厳密には言えない。
- (30) 拙稿「日本美術における奇想の受容―月岡芳年を中心に」註2
- (31) 岡戸敏幸「影」と肖像(『日本の美学』21号、一九九四年)
- (32) 同氏「影絵」の十九世紀―人は「影」に何を見てきたか(『影絵』の十九世紀) 展覧会図録、サントリ―美術館、一九九五年)
- (33) 同氏「江戸の幻影」(『is』67号、一九九五年)
- (34) 同氏「影」と肖像の文化史(『月刊百科』390号、一九九五年)
- (35) 同氏「影法師」の役者絵(『月刊百科』393号、一九九五年)
- (36) 同氏「影法師」と追善(『月刊百科』395号、一九九五年)
- (37) 註1
- (38) 芳幾の画業を総観した近年の貴重な研究としては岡本祐美「落合芳幾―その人と画業―」(『北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)』53巻2号、二〇〇三年) がある。また近年の研究は、個別の作品(群) を取り上げた各論であり、それぞれに興味深いものである【資料1】。
- (39) 東京大学地震研究所および総合図書館サイト <http://gazo.dl.ic.u-tokyo.ac.jp/ishimoto/> (二〇一六年五月参照)
- (40) 但し先述の通り、この番付は特定できていない(註10)。
- (41) 「時世粧年中行事之内」(春色三十六会席)(共に明治元年版行)。
- (42) 註1

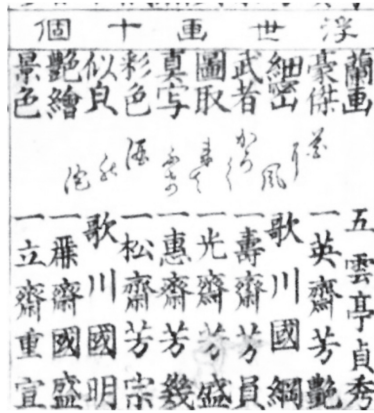
【資料1】落合芳幾文獻目録（未定稿）

No	種別	刊行年 (西暦)	刊行月	刊行年月 (和暦)	タイトル	著者・編者	収録媒体・ 単行書名	巻数、 号数など	発行	備考
1	記事	1861	8	文久3年8月	三題斷作者評判記	春廻家幾久	徳川文芸類聚12		国書刊行会	大正3年12月
2	記事	1861		文久3年	一斎芳幾	坂名垣魯文・ 山々亭有人	粹興奇人傳			
3	記事	1865		慶応元年	鳴久者評判記	悪文舎他笑	徳川文芸類聚12		国書刊行会	大正3年12月
4	番付	1865		慶応元年	歳盛記					
5	番付	1868		明治元年	歳盛記					
6	番付	1885		明治18年	東京流行細見記					
7	記事	1893		明治26年	芳幾	坂島平十郎(虚心)	浮世絵師歌川列伝			
8	記事	1894		明治27年7月	歌川国芳伝	坂島虚心	浮世絵師歌川列伝			
9	単	1895		明治28年2月	仮名反故	野崎左文			非売品として刊行	新聞「小日本」に寄稿、連載 【増補 私の見た明治文壇】東 洋文庫 2007(二分冊)所収
10	記事	1901		明治34年2月	芳幾翁の試筆		歌舞伎	9		
11	記事	1911		明治44年9月	一斎芳幾の末路	(清水晴風)	此花	第17枝		聞き書き。復刻版 ゆまに書房 2007
12	記事	1913		大正2年6月	浮世絵類纂 (其六) 悪摺絵考		此花	第9号	此花社	復刻版 ゆまに書房 2007
13	記事	1913		大正2年6月	歌川芳幾事逸摺会談客物語之図		此花	第9号	此花社	復刻版 ゆまに書房 2007
14	記事	1916		大正5年2月	落合芳幾	莊逸樓主人	浮世絵	9	浮世絵新社	
15	記事	1917		大正6年	落合芳幾<明治の御絵>	霧軒生	日本及日本人	701	政教社	
16	記事	1919		大正8年10月、11月	明治初年の新聞挿絵(上・下)	眞垣左文	浮世絵	48,49号	浮世絵新社	
17	記事	1926		大正15年8月	落合芳幾	樋口二葉	新小説・浮世絵題 味号	大正15年8月		
18	記事	1927		昭和2年10月	浮世絵師の修業時代	樋口二葉	早稲田文学	261		
19	単	1933		昭和8年	続浮世絵大家集成 第三巻 芳虎・芳幾	坂戸彌一郎 編			大風閣書房	
20	単	1933		昭和8年	浮世絵大家集成 第六巻 芳虎・芳幾・三代広重	大風閣書房 編			大風閣書房	
21	単	1933		昭和8年	日本画大成 第23巻 明治篇 3	東方書院編			東方書院	
22	単	1955		昭和30年	幕末明治の浮世絵集成	樋口弘			味燈書屋	昭和37年増補版あり
23	記事	1958		昭和33年8月	第二回(パリ)万国博出品浮世絵関係資料」1～3	菊地貞夫	MUSEUM(東京国立 立博物館研究誌)	89～91	東京国立博物館	
24	記事	1971		昭和46年8月	末期浮世絵の異色作-国芳・芳年・芳幾	鈴木仁一	古美術	34		
25	単	1972		昭和47年	新聞御絵	小野秀雄			毎日新聞社	
26	単	1974		昭和49年4月	浮世絵大系12 清親	高橋誠一郎編			集英社	
27	単	1977		昭和52年	高橋誠一郎コレクション浮世絵 第6巻 芳年・ 芳幾・国周	高橋誠一郎			中央公論社	
28	単	1981		昭和56年8月	原色浮世絵大百科事典 第9巻 作品四 広重- 清親	日本浮世絵協会編			大修館	
29	単	1986		昭和61年	新聞御絵の世界	高橋克彦	PHP研究所			
30	単	1987		昭和62年	幕末・明治のメディア展 新聞・御絵・引札	早稲田大学図書館 編	早稲田大学出版部			
31	単	1988		昭和63年	無修絵：江戸昭和戯作 英名二十八衆句	花輪和一・ 丸尾末広			リプロボート	
32	単	1988		昭和63年	新聞御絵展		ジャーナリズム史 研究会			
33	単	1988		昭和63年	江戸の影絵遊び	山本鷹一	草思社			
34	単	1990		平成2年11月	歌川国芳とその一門展	大田記念美術館	歌川国芳とその一 門展(カタログ)		大田記念美術館	展覧会図録
35	記事	1990		平成2年11月	一勇斎国芳とその門人達	鷹後彦			大田記念美術館	

36	記事	1990	12	平成2年12月	歌舞伎史雑攻 障子にうつる影 影絵演出の諸相その二	松崎 仁	歌舞伎 研究と批評	6	リプロボート	
37	記事	1990	6	平成2年6月	歌舞伎史雑攻 障子にうつる影 影絵演出の諸相その一	松崎 仁	歌舞伎 研究と批評	5	リプロボート	
38	記事	1992	1	平成4年1月	歌舞伎史雑攻 障子にうつる影 影絵演出の諸相その三	松崎 仁	歌舞伎 研究と批評	8	リプロボート	
39	記事	1994		平成6年	「影」と肖像	岡戸敏幸	日本の美学	21	ペリかん社	
40	記事	1995	1	平成7年1月	図版紹介「落合芳幾画『俳優写真鏡』シリーズ」	サントリ—美術館	浮世絵芸術	114	日本浮世絵協会	国際浮世絵学会
41	単	1995	9	平成7年9月	「影絵」の十九世紀	岡戸敏幸	「影絵」の十九世紀		サントリ—美術館	
42	記事	1995	9	平成7年9月	「影絵」の十九世紀—一人は「影」に何を見えたか	岡戸敏幸	「影絵」の十九世紀	67	サントリ—美術館	展覧会図録
43	記事	1995		平成7年	江戸の幻影	岡戸敏幸	ポ—ラ文化研究所			
44	記事	1995		平成7年	「影」と「肖像」の文化史	岡戸敏幸	月刊百科	390	平凡社	
45	記事	1995		平成7年	「影法師」の役者絵	岡戸敏幸	月刊百科	393	平凡社	
46	記事	1995		平成7年	「影法師」と追善	岡戸敏幸	月刊百科	395	平凡社	
47	単	1999		平成11年	東京大学コレクションⅩ ニューズの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界	木下直之・吉見俊哉編	東京大学出版会			
48	電子媒体	2001		平成13年	CD-ROM 日本錦絵新聞集成	土谷礼子編	文生書院			
49	単	2001		平成13年	明治のメディアアーティストたち 錦絵新聞の世界	日本新聞博物館	日本新聞博物館(ニューズバーク)			
50	記事	2002		平成14年	落合芳幾—その生涯と幕末明治における画業の意義	鈴木いつか	文化学研究	11	日本女子大学	
51	単	2002		平成14年	大衆紙の源流—明治期小新聞の研究—	土谷礼子	世界思想社			
52	記事	2002		平成14年	文芸資料研究所蔵版名垣魯文【興画合真影人物誌 版文蔵】 解題・影印:「くまなき影」と影の文化について(調査報告六十七)	佐藤悟	実践女子大学文芸資料研究所年報	21	実践女子大学文芸資料研究所	
53	記事	2003	12	平成15年	ひらがな日本美術史(その102)横を向くもの—月岡芳年・落合芳幾筆【英名二十八衆向】と落合芳幾筆【真写月花乃姿絵】	橋本治	芸術新潮	54-12、通巻648	新潮社	
54	記事	2003	2	平成15年3月	落合芳幾—その人と画業—	岡本祐美	北海道教育大学紀要(人文科学・社 会科学編)	53-2	北海道教育大学	
55	記事	2010		平成22年	落合芳幾《真写月花之姿絵》—画像特定から読み解く「連」との関係性について	蒲 裕美子	美学美術史研究論集	24	名古屋大学文学部美学美術史学研究室	
56	単	2012	11	平成24年11月	はじまりは国券—江戸スビリットのゆくえ	柏木智雄・内山淳子・片多祐子、横濱美術館企画・監修			横浜美術館	展覧会図録
57	記事	2012	3	平成24年3月	新聞錦絵の絵画的表現:—齋芳幾による「東京日々新聞」を中心に—	原山詠子	美学論究	27	関西学院大学文学部美学科研究室	
58	記事	2012	3	平成24年3月	仮名垣魯文・文落合芳幾・画心学身之要慎	小川 祐貴子	明治大学博物館研究報告	17	明治大学博物館	
59	単	2013		平成25年	Cruelty and carnage: superviolent art by yoshitaku & others				Shinbaku Books, 2013.	Ukyo-e master series, Vol6
60	記事	2014	3	平成26年3月	落合芳幾画「春色今様三十六会席」の画中画考	久保佐知恵	サントリ—美術館研究紀要	2		

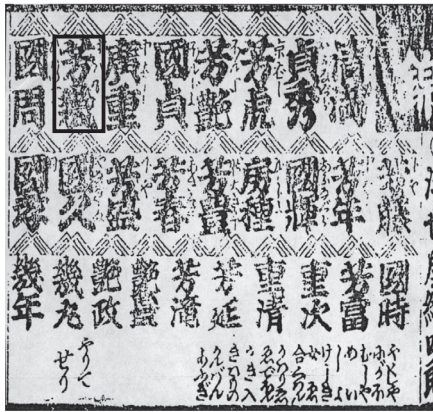
【資料2】 人気番付による芳幾の評価

① 「十日視所／十指々所 花王競十種咲分」 安政6年（1859）か



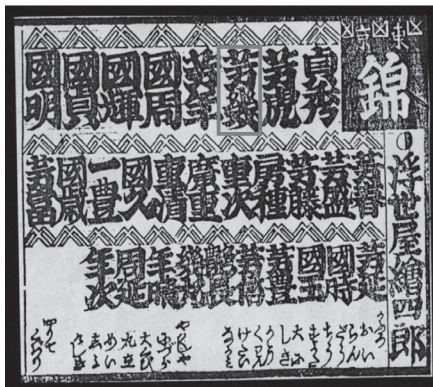
個	十	画	世	浮
景色	艶絵	似	彩色	真写
武者	武取	細密	豪傑	蘭画
花に風 かるく来てふけ 酒の泡				
一立斎重宜	一斎国盛	歌川国明	一松斎芳宗	一惠斎芳幾
			一光斎芳盛	一壽斎芳員
			歌川国綱	一英斎芳艶
				五雲亭貞秀

② 「歳盛記」 慶応元年（1865）



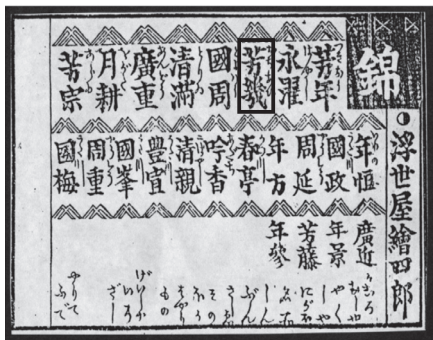
国周	芳幾	広重	国貞	芳虎	貞秀	清満			
国孝	国久	芳盛	芳春	芳豊	房種	国輝	芳年	芳藤	
幾年	幾丸	艶政	艶	芳滝	芳延	重清	重次	芳富	国時

③ 「歳盛記」 明治元年（1868）



国明	国輝	国周	芳年	芳幾	芳虎	貞秀			
芳富	国歳	一豊	国久	重清	広重	重次	房種	芳藤	芳盛
年次	周延	年	幾丸	艶長	芳信	芳豊	国玉	国時	芳延
									芳春

④ 「東京流行細見記」 明治18年（1885）



芳宗	月耕	広重	清満	国周	芳幾	永濯	芳年		
国梅	周重	国峯	豊宣	清親	吟香	春亭	年方	周延	国政
						年参	芳藤	年景	広近
									年恒

※人名漢字はすべて新字体にして記載。

【資料3】落合芳幾年譜（未定稿）

年号	西暦	年齢	事項	出典 ※原則として初出資料
天保4	1833	1	4月、日本堤下の編笠茶屋の子として生まれる-a 吉原遊廓内の引手茶屋の息子として生まれる-bとの記述もあり。本名・落合幾次郎-c。	a：①霽軒生「落合芳幾」、b：①仮名垣魯文「粹興奇人傳」、c：①霽軒生「落合芳幾」
			幼少期を、国芳門下の一好斎芳兼の息・武内久一（木彫作家）と遊んで過ごし、芳兼の仕事を見ていたという。-a 父は芳幾を質屋に奉公に出したが、絵師への夢絶ちがなかったという。-b	a：①霽軒生「落合芳幾」、b：①仮名垣魯文「粹興奇人傳」
嘉永2	1849	17	17,18歳の頃、芳兼の紹介により歌川国芳に入門-a（武内久一の案内で、とする説もある）-b 号は一憲斎（後に憲斎）、朝霞楼、憲阿弥-c、晒落斎などがある。-d	a：①霽軒生「落合芳幾」、b：⑬樋口二葉「落合芳幾」、c：①霽軒生「落合芳幾」、d：⑮井上和雄「浮世絵師傳」
嘉永7	1854	22	合巻「箱根靈験覽仇討」（柳水亭種清作）の挿絵を描く。初筆か。	⑫岡本祐美「落合芳幾～その人と画業～」
安政2	1855	23	10月2日（太陽暦換算では11月11日）、安政江戸地震が発生。その際、吉原遊廓内の惨状を実地で写生し、直ちに三枚続の錦絵として刊行。続々と注文が殺到し、こうした作品だけでも7、8種類ほど描いたという。一説に「二十杯」（四千組）の売り上げを記録したという。 震災時、臨月の妻は登楼客の送りで廊下にて横死する。	①霽軒生「落合芳幾」
安政4	1857	25	合巻「夢結蝶鳥追」初～3編（柳水亭種清作）-a、「採松月景清」初～3編（鈍亭魯文作）の挿絵を手掛ける-b。「此書は彫刻精巧、製本も亦美を尽したれば世評随つて宜しきのみならず魯文も亦初めて檜舞台上に上りたる心地なりと言ひて喜びしとん」。-c	a：「東京大学所蔵 草雙紙目録」、b：「日本古典籍総合目録」、c：⑤野崎左文「仮名反故」
安政6	1859	27	この頃刊行の番付「花王競十種咲分」に「真写 一憲斎芳幾」とその名が載る。	「十日視所／十指々所 花王競十種咲分」
安政7・万延1	1860	28	閏3月21日、柳橋河半楼で画名の披露を行う。	⑦「随一歌川 豊国芳年」
文久1	1861	29	この年刊行の浮世絵師の番付で、東の大関に擬せられる。☆この頃より戯作者・仮名垣魯文や山々亭有人（條野採菊）らとの交友が始まる。「三題嘶」や「興画合」といった催し物が開催。また友人らの内輪話や行いを諷刺画で描いて配る「悪摺絵」が流行し、その絵を数多く手掛ける。 3月、師・国芳没に伴い、国芳の肖像（死絵）を手掛ける-a。葬儀の際、弟子・芳年を足蹴にしたという-b。	①霽軒生「落合芳幾」 a：⑰太田記念美術館編「歌川国芳とその一門展」図録、b：⑳山中古洞「芳年伝備考」第二稿
文久3	1863	31	この年刊行の『三題嘶作者評判記』には「上々吉」と記される。 山々亭有人、仮名垣魯文らと結成した「粹興連」のメンバーを記した『粹興奇人傳』（有人・魯文編、芳幾挿画）を刊行。芳幾自身の略伝も掲載される。	①霽軒生「落合芳幾」 ①「粹興奇人傳」
慶應1	1865	33	悪摺の評判記である「鳴久者評判記」に、作者としてその名が載る。 この年刊行の『歳盛記』（流行一覽歳盛記）の絵師人気番付で、7位に掲載される。	⑨「浮世絵類纂（其六） 悪摺絵考」 ②「歳盛記」
慶應2	1866	34	弟子である月岡芳年との競作による「英名二十八衆句」（28枚揃、各14図）が刊行。 バリ万国博覧会への肉筆浮世絵画帖出品のため、貞秀、芳宗を総代とし、二代国貞、国周、二代国輝、芳艶、芳年と分担制作を行う。	⑬菊地貞夫「第二回バリ万国博出品浮世絵関係資料」1～3
慶應3	1867	35	興画会を主催した波月亭花雪の三回忌追善として「久萬那幾影」を刊行。興画連のメンバーの肖像を影絵で表現したもので、評判が高かったという。芳幾自身の影絵および略伝も掲載。 俳優の肖像を影絵で表現した「真写月花之姿絵」シリーズ38枚を刊行して好評を博す。	⑩莊逸楼主人「落合芳幾」、⑪霽軒生「落合芳幾」、「久萬那幾影」 ⑩莊逸楼主人「落合芳幾」※但し版行年代を「明治になって」とする。
慶應4・明治1	1868	36	錦絵「時世粧年中行事之内」（三枚続）シリーズを刊行。 錦絵「春色三十六会席」シリーズ37枚を刊行（12月から明治2年4月まで）。 この年刊行の『歳盛記』（東京歳盛記）の絵師人気番付で第3位に掲載される。貞秀、芳虎、芳幾、芳年、国周の順。	⑰杉本隆一編「歌川派年譜（未定稿）」 ③「歳盛記」
明治3	1870	38	「俳優写真鏡」シリーズ10枚余を刊行。	⑳図版紹介「落合芳幾画「俳優写真鏡」シリーズ」
明治5	1872	40	『東京日日新聞』を同志と共に創刊-a。創刊時のメンバーは戯作者・山々亭有人（條野採菊）、西田伝助、そして芳幾であった。-b。	a：①霽軒生「落合芳幾」、b：㉑吉見俊哉・土屋礼子監修「明治のメディア師たち—錦絵新聞の世界」展図録
明治6	1873	41	10月、他の国芳門人たちと共に国芳十三回忌供養を行い、向島三囲稲荷の絵馬堂西に石碑「一勇斎歌川先生墓表」を建立（現存）。現存の門人としては6番目に名が刻まれる。また「芳幾社中」として3名の門人（幾丸、幾英、幾勝）の名が見られる。	⑲鈴木重三「総説」同氏「国芳」所収、「一勇斎歌川先生墓表」（三囲稲荷）
明治7	1874	42	「東京日日新聞大錦」と題した錦絵新聞を刊行。これは『東京日日新聞』に掲載されたニュース記事を題材として錦絵化したもので、大いに人気を博す。刊行は同年10月から8年7月まで。	⑮井上和雄「浮世絵師傳」

明治8	1875	43	『平仮名絵入新聞』を創刊し、自らその挿絵を描く。これが新聞に挿絵を入れた最初の事例となった。この新聞は明治10年、『東京絵入新聞』と改称し、その経営にあたる。	⑩ 莊逸楼主人「落合芳幾」
明治12	1879	47	演劇雑誌『歌舞伎新報』を同志と共に創刊し、俳優の似顔絵を描く-a。18年間続いたこの雑誌は、各座の演目の筋書きや脚本を掲載したもので、その多くの挿絵を担当-b。	a-⑩ 莊逸楼主人「落合芳幾」、b-②③ 岡本祐美「落合芳幾～その人と画業～」
明治14	1881	49	『東京日日新聞』を退社。政党機関紙としての性格を色濃くしたことが退社の原因かという。	②③ 岡本祐美「落合芳幾～その人と画業～」
明治15	1882	50	同志の一人・広岡幸助が主となって創立した栄泉社で『今古実録』の出版を開始。第一巻と目されるのは『大塩平八郎伝記』。挿絵を担当。	⑫ 樋口二葉「落合芳幾」、『今古実録 大塩平八郎伝記』（国文学研究資料館蔵）
明治18	1885	53	この年刊行の『東京流行細見記』の絵師人気番付で、第3位に掲載される。芳年、永濯、芳幾、国周の順。	④ 『東京流行細見記』
明治20	1887	55	錦絵「市川家十八番」を刊行。錦絵作品の発表はこれが最後期のものとなる。	⑪ 霧軒生「落合芳幾」
明治22	1889	57	『東京絵入新聞』に「日本写真毎月の月」と題した市井の人物の影の肖像を連載（1月5日から3月21日まで）。	⑳ 岡戸敏幸「影」と肖像」
明治23	1890	58	6月、『東京絵入新聞』が終刊。 終刊後、葺屋町にあるレンガ造り三階建ての家を借りて、妻、息子、娘夫婦と共に住む。「美術人形」の制作など様々な事業を試みるがごとごとく失敗。ついに一家離散して外神田の旅籠町へ転居し、パン屋を開店するも失敗。借金に追われる生活となる。	「明治・大正時代の主な新聞とその参考文献（関東地域）」国立国会図書館サイト https://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-700041.php ⑧ 「一蕙斎芳幾の末路」
明治32	1899	67	会主となり、師・歌川国芳四十回忌の追善書画会を開催する。これは当時の窮状を見かねた友人たちの勧めによるものだったが、そこで得た収入は借金取りに回収されて夜逃げをする羽目に陥る。この後、本所太平町の棟割長屋へ移り、長い病を患う。	⑧ 「一蕙斎芳幾の末路」、「先師一勇斎国芳翁四十回忌追善書画会」（案内状：⑩に掲載）
明治34	1901	69	春、歌舞伎俳優37名の似顔絵を絹本で制作。これを雑誌『歌舞伎』に掲載する予定との記事あり。 雑誌『歌舞伎』3,9,10,11月発行号に、役者似顔絵を掲載。3、10月掲載作品には、年齢69歳が記される。 肉筆画「地獄太夫図」を制作。	⑥ 「芳幾翁の試筆」 ②③ 岡本祐美「落合芳幾～その人と画業～」 ②③ 岡本祐美「落合芳幾～その人と画業～」
明治36	1903	71	肉筆画「布袋唐子図」、「猩々図」を制作。	⑱ 太田記念美術館編『歌川国芳とその一門展』図録、②③ 岡本祐美「落合芳幾～その人と画業～」
明治37	1904	72	2月6日、本所太平町の仮寓にて没。法名は「從善院芳幾日確居士」、浅草吉野町安盛寺（日蓮宗）に葬る。しかし同寺は明治末に浅草清島町の盛泰寺と合併したため、落合家の墓所も池袋蟹ヶ窪に移動した。	⑩ 莊逸楼主人「落合芳幾」

出典文献一覧

- ① 仮名垣魯文・山々亭有人『粹興奇人傳』文久3年
- ② 『歳盛記』、慶応元年
- ③ 『歳盛記』明治元年
- ④ 『東京流行細見記』明治18年
- ⑤ 野崎左文「仮名反故」明治28年（『増補 私の見た明治文壇 2』東洋文庫、2007年 所収）
- ⑥ 「芳幾翁の試筆」『歌舞伎』9号、明治34年2月
- ⑦ 「随一歌川 豊国芳年」『此花』第一枝、明治43年1月
- ⑧ 「一蕙斎芳幾の末路」『此花』第十七枝、明治44年9月
- ⑨ 「浮世絵類纂（其六） 悪摺絵考」『此花』9号、大正2年6月
- ⑩ 莊逸楼主人「落合芳幾」『浮世絵』9号、浮世絵新社、大正5年2月
- ⑪ 霧軒生「落合芳幾 <明治の錦絵>」『日本及日本人』701号、大正6年
- ⑫ 樋口二葉「落合芳幾」『新小説』大正15年8月号（浮世絵趣味号）
- ⑬ 樋口二葉「浮世絵師の修業時代」『早稲田文学』261号、昭和2年10月
- ⑭ 山中古洞「芳年伝備考」第二稿 『浮世絵志』第17号、昭和5年5月
- ⑮ 井上和雄『浮世絵師傳』渡邊版画店、昭和8年
- ⑯ 菊地貞夫「第二回パリ万国博出品浮世絵関係資料」1～3、『MUSEUM（東京国立博物館研究誌）』89～91、昭和33年8～10月
- ⑰ 杉本隆一編「歌川派年譜（未定稿）」『歌川派展』図録、太田記念美術館、昭和61年10月
- ⑱ 太田記念美術館編『歌川国芳とその一門展』図録、太田記念美術館、平成2年11月
- ⑲ 鈴木重三「総説」同氏『国芳』平凡社、平成4年6月
- ⑳ 岡戸敏幸「影」と肖像『日本の美学』21号、平成6年7月
- ㉑ 図版紹介「落合芳幾画「俳優写真鏡」シリーズ」『浮世絵芸術』114号、平成7年1月
- ㉒ 吉見俊哉・土屋礼子監修『明治のメディア師たち—錦絵新聞の世界』展図録 ニュースパーク（日本新聞博物館）、平成13年10月
- ㉓ 岡本祐美「落合芳幾～その人と画業～」『北海道教育大学紀要』（人文学・社会科学編）第53巻第2号、平成15年2月

Fundamental Study on OCHIAI Yoshiiku as Ukiyo-e artist

SUGAWARA Mayumi

OCHIAI Yoshiiku (落合芳幾) (1833-1904) is one of the representative ukiyo-e artists during the late Edo Period and the Meiji Period. He was famous existence as a pupil of UTAGAWA Kuniyoshi (歌川国芳) as well as TSUKIOKA Yoshitoshi (月岡芳年) (1839-92).

“Eimei Niju-hassyu-ku” (「英名二十八衆句」) that Yoshiiku produced from 1866 to 1867 is one of his typical works. And this is a series of the Ukiyo-e print which shared with Yoshitoshi. This work is also the fact that it was found well to win some special popularity at present as a typical example of “bloody picture” (「血みどろ絵」).

In addition Yoshiiku is, in 1872, is a person who participated in first publication of “Tokyo Nichinichi Shimbun (『東京日日新聞』)” which is a Japan’s first daily newspaper in 1872 and played an active part by a publishing world. The “Shimbun-Nisihiki-e (新聞錦絵)” or “Nishiki-e Shimbun (錦絵新聞)” which pictorialized the contents of a newspaper article were new media in early years of Meiji era, and is a Yoshiiku was pioneered this. From 1874 to 1875 was published “Tokyo Nichi Nichi Shimbun O-nishiki (『東京日日新聞大錦』)” is it. This new media gained popularity. Since 1875, this work was imitated and work that was to follow in this, have been numerous published. In addition Yoshiiku is also known as the first painter who drew the illustrations of the newspaper. It has opened up a new painting field of newspaper illustrations is a major achievement of Yoshiiku. However, on the other hand Yoshiiku is, since the late 1870s, hardly the production of ukiyo-e print works. It is because he had to go to main the frontispiece and illustrations production of newspapers and magazines.

Now, a study of history of fine arts about OCHIAI Yoshiiku isn’t performed so much. It is very similar to the situation of research on TOYOHARA Kunichika (豊原国周) (1835-1900) who was active in the same period. And solo exhibition took up the Yoshiiku

also not been held, art book, which was published the works of Yoshiiku also not yet been published.

In this paper, it was carried out basic research on OCHIAI Yoshiiku a ukiyo-e artist. First, collect all of the literature that describes the Yoshiiku, did this to the list. Next, we examined whether the study on Yoshiiku have been made how ever. Further collected a description of the life of Yoshiiku that was noted in the article, to create his chronology, I knitted a detailed biography.

I found out that several features are thought to consider a study about Yoshiiku. I found out that several features are thought to consider a study about Yoshiiku. One is to be able to see description about his roots and personality from the time when Yoshiiku was still the first half in the generation 30 years old. For example in “SUIKYO – KIJINDEN (『粹興奇人傳』)” and “KUMANA-KIKAGE (『久万那幾影』)” (1867), his portrait and short biography are recorded. It’s said that two features aren’t completely studied by about 25 years from the first half in 1930 ’s to the middle in 1950 ’s about Yoshiiku. Interest in the Ukiyo-e artists of the Meiji era, including Yoshiiku, has become rapidly reduced from that time, this situation is common to Ukiyo-e artists of this era. But evaluation of Yoshiiku is much lower. I think about it, it is the reason why is that Yoshiiku is not produced almost the ukiyo-e prints in later life.

In conclusion of this paper, I, not only as ukiyo-e artist Yoshiiku, and proposed that they would also evaluated as a painter who built a new relationship with the media, such as newspapers and magazines. I also, and proposed that should also pick up a new about his ukiyo-e print works that so far in the study had not been carried out.